

ピアノ初心者への効果的な指導方法

——対象者の課題に合った教則本を用いて——

村松 菜歩*・大野内 愛**

Effective Teaching Methods for Beginners of Piano:
Using Instructional Texts Matching Problems

Naho MURAMATSU* and Ai OONOUCHI**

はじめに

日本で使用されているピアノ教則本といえば、多くの人々が『バイエルピアノ教則本』（以下「バイエル」）を挙げるだろう。本学でもピアノ経験者の多くが「バイエル」を使ってピアノの指導を受けていたと回答している。宮脇（2001）は全国の保育者養成校に質問紙調査を行い、その結果54%の養成校が「バイエル」を使用していると述べている。広島文教女子大学（以下、本学）においても初心者へのピアノ指導を行う際に「バイエル」を用いているが、そこで課題に感じていたことがある。1つ目に、「バイエル」のみを単独で扱うことの限界について、2つ目は初心者の困難さはそれぞれ異なるにもかかわらず、全員が同じ教則本を使用することの問題点についてである。

したがって本稿では、ピアノ演奏に必要な能力とは何かを文献により明らかにした上で、まずピアノ初心者を対象としてテストを行い、それぞれのピアノ演奏に関わる困難さを発見する。また日本で流通している、「バイエル」を含む様々な教則本の特徴を分析した上で、対象者の課題に合ったピアノ教則本を用い、効果的なピ

アノ指導のあり方を検討する。

1 ピアノ演奏に必要な能力

藤井・小堀（2013）は「ピアノを演奏するためには、感覚、知覚、運動、記憶、学習、注意、情動など様々な認知過程が複雑に関わっている」と述べている。さらに大浦（1987）は「記譜された音楽作品を演奏するには、少なくとも、楽譜に記されている情報を読み取ること、読み取った情報を演奏のための指などの運動指令に変換すること、そして運動プログラムどおりに正確に指などを動かすために運動を制御すること、の3つの過程を経なければならない」と述べている。ピアノ演奏とは、実際に音を出すまでの過程だけでなく、奏でられた音が楽譜どおりであるか否かの確認を聴覚で行い、その情報が脳へフィードバックされるまでの流れを含む。

視覚、脳、腕、指（手）、聴覚の一連の働きを図にまとめると以下ようになる。

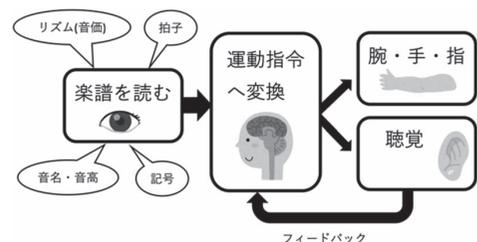


図1 視覚、脳、腕、指（手）、聴覚の一連の働き

* 本学初等教育学科35期生

** 本学講師

つまり、ピアノを演奏するということは知識としての楽譜の読み取り、実際の音を聴き分ける力、体の動作との結びつきが必要だということである。ピアノの演奏は人間の行動の中でも最も複雑なものの1つと言われている。それは前述したような一連の働きが不可欠だからである。ピアノの演奏は、こうした一連の働きを拍や拍子によって連続的に行わなければならない。

2 ピアノ教則本の分析

2.1. 先行研究の検討

ピアノ教則本の分析についてはこれまでもいくつかの研究が行われてきた。

徳富・安原(2004)は、初心者が使用するであろうピアノ教則本として「バイエル」の他、『ツェルニー100番練習曲 Op. 139』(以下「ツェルニー」)『メトードローズピアノ教則本』(以下「メトードローズ」)『バスティンピアノバイシックス』(以下「バスティン」)『バーナムピアノテクニク』(以下「バーナム」)を比較している。比較の基準は、音価、調性、拍子、リズム、導入法、表現法、選曲、指の運動などである。各教則本の進度を明確にするため、各教則本の1,000小節までの内容を比較している。その結果、次の特徴が明らかとなっている。「バイエル」は調性や拍子、記号など全てにおいて新しいものが出てくる量は最も少なく、多くのものを一度に学ぶというよりはむしろ1つずつ、少しずつ前進していく。「ツェルニー」は各曲の目的が明確ではあるが、変化が乏しく、途中で飽きてしまう可能性がある。「メトードローズ」は片手ずつの練習から曲へ、というワンパターンな形式で進んでいくが、片手の練習の後は必ず両手で曲が弾けるようになるため、そうした楽しみはある。「バスティン」はカラーが豊富でありピアノを弾くことをだけでなく、楽典を学び

ながら、書きながら学ぶことができる。また拍子や調性は多くも少なくもないため、学びやすい。「バーナム」は興味をそそるような題名とイラストに特徴があり、次々に新しい内容が出てくるため常に新鮮な気持ちになれる。しかし音価や記号の進度が他の教則本と異なっているということは、初心者にとっては難しいのかもしれない。

中村(2015)は、ピアノ初心者のレッスンにおける教則本として、「バイエル」の他、「バスティン」、「バーナム」、「メトードローズ」、『トンプソン現代ピアノ教本』(以下「トンプソン」)、『アルフレッド・ピアノライブラリー』(以下「アルフレッド」)、『グローバーピアノ教本』(以下「グローバー」)を比較している。比較の基準は、調性、拍子、強弱や曲想に関する記号であり、どの教則本も1巻のみを扱っている。その結果、次のことが明らかとなった。「バイエル」は1巻だけでも調性、拍子、強弱や曲想に関する記号など広い分野にわたって学習できる。「バーナム」は指の運動が重要視されているため、強弱や曲想に関する記号は一切出てこない。調性に注目すると、「トンプソン」は多彩な調で書かれている。「バーナム」は移調を学ぶことが前提となっているため、すべてハ長調で書かれている。「バスティン」と「グローバー」は系統立てて全調性を勉強することになっているため、1巻だけでの使用は難しい。「メトードローズ」は1巻だけで学ぶことができるが、表出する調性が少ない。

こうした比較研究は行われているが、対象者に合った教則本の選択については、検討されていない。

2.2. 比較の方法

まず、今回比較検討するピアノ教則本を以下

のように決定した。

- ・「グローバー」
- ・「バーナム」
- ・『ピアノ・スポーツ』（以下「ピアノスポーツ」）
- ・『あたらしいピアノのおけいこ』（以下「ピアノのおけいこ」）
- ・「バステイン」
- ・「トンプソン」
- ・「メトードローズ」
- ・「バイエル」

比較の基準は、先行研究を参考にし、リズム（音価）、拍子、音域、作曲方法、1巻での到達進度、その他、の6つとし、中村（2015）を参考に、1巻のみを比較対象とする。

今回、先行研究にはなかった「ピアノスポーツ」、及び「ピアノのおけいこ」を比較の対象とした。「ピアノスポーツ」は2001年に初版が日本で出版され、ピアノとスポーツを掛け合わせたイラストと指の動きが特徴の教則本であり、初心者の興味をひくものではないかと考えたためである。「ピアノのおけいこ」は、唯一日本人が監修したものであり、日本人のよく知っている曲が随所に掲載されている。音符が非常に大きく、読譜力の養成と、正確なリズム感の習得を目標としたものであり、日本人のピアノ初心者に適しているのではないかと考えたためである。

2.3. 比較結果からみた各教則本の特徴

前述の6つの観点から比較を行った結果、次のような特徴が明らかとなった。

以上の8つの教則本を比較した結果、取り扱われている音符の音価や拍子については大きな差が見られなかった。しかし、それらが出てくる頻度や順番には大きな差が見られた。また1曲の長さの差も大きなものであった。さらに知識を身につけながらピアノ演奏ができるよう、鍵盤のイラストや表情記号の説明が詳しくなされているものや、指を動かす練習がしっかりと

表1 各教則本の特徴

グ ロ ー バ ー	<ul style="list-style-type: none"> ・表情記号や速度記号の説明が丁寧 ・鍵盤のイラストと楽譜で音名・音高の一致がしやすい ・臨時記号の取り扱いが早い ・全調移調の練習ができる ・1曲が長い ・取り扱われている表情記号が多い
バ ー ナ ム	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な指の動かし方を練習できる ・取り扱われているリズムが豊富 ・1曲が短い（4小節ほど） ・タイトルやイラストから奏法がイメージできる ・ほとんど4/4拍子 ・4分音符が多い ・全てハ長調 ・表情記号や速度記号の取り扱いがない
ピ ア ノ ス ポ ー ツ	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な指の動かし方を練習できる（バーナムより難易度高め） ・スポーツの動きをリズムや音の動きで表現している ・片手ずつ練習ができる ・1曲が短い（4～8小節ほど） ・ほとんど4/4拍子 ・全てハ長調 ・表情記号や速度記号の取り扱いがない
お け い こ の	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜が大きくて譜読みが行いやすい ・徐々に音域が広い曲を取り扱うことができる ・他の教則本の曲や童謡も含まれている ・8分音符の取り扱いがない ・左手奏の取り扱いが遅い
バ ス テ イ ン	<ul style="list-style-type: none"> ・1曲目からハ音記号の取り扱いがある ・臨時記号の取り扱いが多い ・黒鍵の取り扱いが早い ・難易度は高めなのである程度の技能が必要
ト ン プ ソ ン	<ul style="list-style-type: none"> ・音名・音高・表情記号の説明が丁寧 ・全ての曲に指番号が付いている ・歌詞がついている曲が多い ・様々な調性を体験できる
メ ト ー ド ロ ー ズ	<ul style="list-style-type: none"> ・二点ハ音から始まる ・ポジション移動以外の演奏技法は出てこない ・1曲で左右の手をそれぞれ細かく練習できる ・演奏のポイントが丁寧に書いてある ・8分音符の取り扱いがない ・1冊での進捗が遅い
バ イ エ ル	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム（音価）が豊富 ・拍子が豊富 ・様々な音型が含まれている ・1曲の中に扱われている表情記号が多い ・ハ音記号の取り扱いが遅い ・表情記号の説明が少ない

きるよう、1曲の中にポジション移動や指かえ、指くぐりなどの奏法が多くあるもの、初心者が楽しく演奏できるよう、題名やイラストに工夫が見られるものなどがあつた。

3 ピアノ初心者への指導の実践

3.1. 初心者へのピアノ演奏に関するテスト

まずピアノ初心者それぞれの課題を見つけるため、本学人間科学部初等教育学科1年生のピアノ初心者27名に対し、ピアノ演奏に関するテストを3種類行った。テストの内容は以下のとおりである。

- ・ピアノ演奏のテスト (技能)
- ・リズム打ちのテスト (知識・技能)
- ・音高の譜読みテスト (知識)

ピアノ演奏のテストでは、「どんぐりころころ」(作詞：青木存義、作曲：梁田貞)の最初の2小節を用い、指導者(以下、「指導者」とは村松を指す)が演奏している様子をスクリーンに映して見せた。それを30秒の練習ののち、同じように演奏させた。



図2 「どんぐりころころ」の旋律



図3 「どんぐりころころ」の両手奏

1回目は図2のように右手での旋律の演奏、2回目は図2を左手で演奏、3回目は図2をオクターヴで両手演奏、4回目は図3のように左右が違う動きでの両手奏で、指の動きを見た。なお、初心者でも弾き始めがわかるように鍵盤

に色のついた付箋を貼った。知識を問うテストではないため、楽譜は提示せず、指導者のお手本のみを示した。

リズム打ちのテストでは、4/4拍子1小節分のリズムをフラッシュカードに提示し、そのリズムを手拍子させた。わからないリズムだった場合はその問題を飛ばすこともできる。30秒間でどれだけのリズムが叩けるかを見た。用いた音符は全音符、2分音符、4分音符(休符)、8分音符(休符)、16分音符である。

音高の譜読みテストでは、フラッシュカードに書かれた五線譜上の音をピアノの鍵盤の正しい位置で弾かせる。わからない音の場合は、その問題を飛ばすこともできる。30秒間でどれだけの正しい音が叩けるかを見た。用いた音の音域は以下の図の通りである。ト音譜表、ヘ音譜表それぞれシャープやフラットなどの変化記号も用いた。



図4 音高の譜読みテストでの音域

この3種類のテストの結果、ピアノ初心者とその課題別に4つのグループに分けることができた。①知識に問題のあるグループ、②技能に問題のあるグループ、③知識・技能の両方に問題のあるグループ、④問題なしグループ、の4つである。ここで言う「知識」とは、音符のもつ音価やヘ音記号など、認知的な面のことである。また「技能」とは自分の脳が指令を出した通りに指を動かすことを言う。この4つのグループに初心者を分類し、本稿における対象者を各グループ2名ずつ、計8名選定した。

3.2. 対象者への指導の実践

まず、各グループの課題に適していると考えられる教則本を以下のように決定した。

表2 各グループで指導に使用する教則本

グループ	教則本
①知識に問題のあるグループ	・「グローバー」
②技能に問題のあるグループ	・「バーナム」 ・「ピアニスポーツ」
③知識・技能の両方に問題のあるグループ	・「ピアノのおけいこ」
④問題なしグループ	・「バステイン」

①知識に問題のあるグループには、「グローバー」を選んだ。この対象者はテストの結果、音名は分かっているが音高がわからないといった問題があった。「グローバー」は鍵盤のイラストにより新出の音の音高と鍵盤の位置の一致が容易く、また拍子や表情記号などの説明が1つ1つ丁寧に示されているため、適していると考えられる。

②技能に問題のあるグループには「バーナム」と「ピアニスポーツ」を選んだ。この対象者はテストの結果、音が跳躍する部分などで指がスムーズに動かないという課題が見つかった。「バーナム」と「ピアニスポーツ」は4～8小節程度の短い曲の中にポジション移動や指くくり、指かえなど指の様々な動きを練習することができるため、適していると考えられる。なお、難易度の都合上、「バーナム」が修了した後、「ピアニスポーツ」を使用する。

③知識・技能の両方に問題のあるグループには、「ピアノのおけいこ」を選んだ。テストの結果からこの対象者は、ピアノの右手での片手演奏からつまづきが見られ、1小節さえも正しく弾くことができなかった。またリズム打ちでも提示されているリズムを理解するのに時間がか

かった。ピアノのおけいこは、まず右手のみの演奏からゆっくり丁寧に学ぶことができる。また音域も狭いものから徐々に広がっていく。

④問題なしグループには、「バステイン」を選んだ。この対象者は、ただ単にピアノを弾くという経験がこれまでになかっただけで、知識も技能も持ち合わせている。したがってある程度の難易度のものを経験することが必要であると考えられる。「バステイン」は1曲目からへ音譜表が登場し、臨時記号のついている曲も多いため、黒鍵を使うなど様々な音型を経験することができる。

以上の教則本を用いて、平成30年度前期に全11回の指導を行った。1回の指導は各グループ約20分程度である。

3.3. 実践の結果

それぞれのグループへの指導実践の結果をまとめる。

①知識に問題のあるグループには、技能には問題がないため、知識とピアノ演奏を直結することができるよう指導を行った。指導を始めた頃は、ト音譜表、へ音譜表のどちらも譜読みをすることが困難であった上、音符の音価や音高、強弱記号を理解することもできていなかった。今回使用した「グローバー」は次の2つの点で対象者に効果があったと言える。

まず1点目は、巻頭に「音楽の基礎」「鍵盤と音符」「拍子記号」などが大きく掲載されていたことである。特に鍵盤と音符の図は、書かれた音と鍵盤の位置の一致ができない対象者にとって効果的であり、図で確認をした後にピアノで演奏することにより、確実にこの課題をクリアすることができた。2点目は早い段階からへ音記号を扱っていた点である。前述したイラストを用いながら、へ音譜表での譜読みをすること

ができた。

このグループへの「グローバー」使用の課題は3点ある。第1の課題は、進度が遅いということである。音名、音高、拍子、リズム、音価、強弱記号を指導した上でピアノ演奏の指導を行わなければならないため、進度が遅く、11回の指導で「グローバー」の半分程度までしか進めることができなかった。第2の課題は、3/4拍子を指導する効果的な手段がなかったことである。対象者は4/4拍子の曲は容易に演奏することができたが、3拍子を理解することが難しく、なかなかうまく演奏することができなかった。3拍子を指導するための効果的なものが「グローバー」には存在しなかった。第3の課題は1曲の中に取り扱われている表情記号が多いということである。知識に問題のある対象者にとっては、楽譜から音名や音高、リズムを読み取ることだけで精一杯であり、強弱記号や速度記号などを意識した演奏は困難なものであった。

②技能に問題のあるグループには、様々な指の動かし方を通して、指1本1本を確実に動かすことができるようになることを目指して指導を行った。使用した「バーナム」及び「ピアノスポーツ」は次の2つの点で対象者に効果があったと言える。

1点目は指の様々な動きを練習することで、1本1本の指を鍛えることができた点である。「バーナム」及び「ピアノスポーツ」は1曲の中に複数の指の動きがあるが、音域が狭いため、指の動きに集中して練習をすることができた。しかもこれらの教則本は右手が旋律で左手が伴奏、といった形の曲ではなく、左右どちらの指も同じように鍛えることができた。2点目は、曲のタイトルとイラストから奏法を容易に理解できた点である。イメージをもって演奏することは、音楽的にも非常に重要なことである。そ

のタイトルとイラストが単純なものだったことも、イメージを持ちやすくなった一因であろう。

このグループへ「バーナム」と「ピアノスポーツ」を使った課題は2点ある。第1の課題は、取り扱われている曲が全てハ長調であったことである。本来であれば応用として移調を取り扱うべきだったが、対象者にそこまでの余裕が見られなかったため、教則本のままの内容しか取り扱うことができなかった。したがって、黒鍵を用いるような音型をあまり経験させられなかった。第2の課題は、4分音符の練習時間が長かったことである。「バーナム」は4分音符での曲からスタートし、8分音符が出てくるのは51曲目であった。4分音符での練習が長くなったことにより、様々なリズムを経験することができなかった。

③知識・技能の両方に問題のあるグループには、音楽の基礎的な知識を身に付けるとともに、その知識とピアノ演奏を直結させ、指1本1本を確実に動かすことができるようになることを目指して指導を行なった。このグループに使用した「ピアノのおけいこ」は、以下の3点の効果があつたと言える。

1点目は、楽譜が大きく、対象者が譜読みを行いやすいことである。対象者と指導者が大きな楽譜を見ながら一緒に音高を確認し、レッスンを進めることができた。2点目は音域の広がり方や指の動かし方が段階的であったことである。1つの練習番号の中に、5曲の曲が含まれており、音域や取り扱われている音高、リズムは同じでも指の動かし方が異なるため、様々な指の動きを容易に学ぶことができた。3点目は、対象者が知っている曲が含まれていたことである。「かつこう」（ドイツ民謡）「ぶんぶんぶん」（ボヘミア民謡）などの曲は対象者にとって馴染みのあるものであり、知らない曲に取り組むよ

りも譜読みが容易い様子であった。また対象者は、知っている曲を演奏することができたという達成感を味わうことができた。

このグループへ「ピアノのおけいこ」を使用した課題は2点ある。第1の課題はどの音にも運指番号が書かれていたため、対象者が音符ではなく運指番号を見て演奏してしまったという点である。「ピアノのおけいこ」は全てハ長調で、しかもポジション移動がなかったため、運指番号さえ見ればどの曲も演奏することができてしまった。第2の課題は、1曲の長さが長いことである。特にこのグループは知識及び技能の両方に課題のある対象者のため、譜読みと指を動かすことの片方だけでも精一杯である。「ピアノのおけいこ」はスタートしてから21番までは片手奏であるが、それ以降は両手奏になる。片手奏の間は1曲が4小節であったのに、両手奏になったところから突然10小節もの長さを扱うようになってしまった。そのため、対象者にとっては1曲にかかる時間が長くなり、意欲の低下にもつながってしまった。

④問題なしグループには、知識にも技能にも問題はないため、少しでも早くピアノを弾くという行為に慣れさせることを目的として指導を行なった。このグループに使用した「バステイン」は、以下の3点の効果が見られた。

1点目は、早い段階から臨時記号としてシャープやフラットが扱われていたため、黒鍵を使った様々な指の動かし方を経験できた点である。技能に問題がなかったため、ポジション移動のないような易しいレベルでは対象者にとっては退屈となっただろう。2点目はハ音記号の取り扱いが早かったため、初期の段階から広い音域の曲を経験できたことである。指導を始めた時には、対象者はハ音記号を正しく理解できていなかったが、早い段階でハ音記号を学

び、演奏することができた。3点目は、早い段階から和音奏が扱われていたことである。一度に2本以上の指で演奏する和音奏は、初心者には大変難易度の高い指の動きと言える。「バステイン」ではこれが9曲目から扱われている。その和音練習にも工夫がなされており、まず予備練習をしてから和音奏に入ることになっていたため、丁寧に和音の1つ1つの音を確認することができた。

また、このグループに「バステイン」を使用した課題は特に見られなかった。もともと知識にも技術にも問題はなかったため、ある程度の曲の長さも対象者のレベルに合っており、さらには1曲の中で、和音やスタッカート、レガートなど、様々な内容を扱うことができた。複雑な指の動きなどもあり、退屈することなく、順調にレベルアップしていくことができた。

4 効果的な指導方法の提案

本稿では、対象者の課題に適していると考えられる教則本を使用し、指導を行なった。その結果、前述のようにさらなる課題が見つかったため、ここではその課題を克服するための指導方法の提案を行う。

まず、①知識に問題のあるグループに「グロバー」を使用した上での課題は、進度が遅いこと、3/4拍子が効果的に指導できなかったこと、取り扱われる表情記号が多かったことである。このグループは知識、つまり楽譜に書かれてある音高とリズムを読むということに課題のある対象者である。つまりはピアノを弾く上で1番最初に行われるべき内容である、視覚から入ってきた楽譜の情報を頭で理解するという段階でつまずいている。こうした対象者に対し、音高とリズム以外に読み取るべき情報が増えることは、ピアノを弾く上でより大きな障害とな

り、進度が遅くなってしまいます。したがって、このグループでは強弱記号や速度記号など音楽の表情記号の取り扱い、あまり早い段階では行わないことが望ましい。また、3/4拍子の指導について課題となった原因は、4/4拍子の段階からあまり拍子の指導ができていなかったことが考えられる。したがって、4/4拍子の曲を扱っている段階で、「グローバー」の図などを使い、4/4拍子とは1小節にどれだけでの音符が入るのか、何の音符が1拍となるのか、などを学ばせ、さらに演奏中には指導者から「1、2、3、4」と声かけを行うことにより、3/4拍子が新たに扱われた際にも、つまづくことなく理解が可能となるのではないだろうか。

次に②技能に問題のあるグループに「バーナム」と「ピアノスポーツ」を使用した上での課題は、ハ長調の曲ばかりであったこと、4分音符の練習時間が長かったことである。もちろん、ハ長調のものを移調させて練習することも効果的であろうが、指を動かすことで精一杯な対象者にとって、移調についての内容を同時に理解させるのは困難なことであろう。したがって、この2つの教則本以外に「バイエル」を併用することを提案する。「バイエル」は身につけられる技術に偏りがなく、様々な調性やリズム、音型など満遍なく学ぶことのできる教則本である。したがって、例えば「ピアノスポーツ」でスポーツの動きをイメージしながらスタッカート奏を学んだ後、スタッカート奏を含む「バイエル」の練習曲を扱う、といった方法である。「バイエル」のみを扱う場合とは異なり、対象者は「ピアノスポーツ」でスタッカート奏の手の動きや力の入れ方、抜き方を学んでいるため、「バイエル」の練習曲に取り組む際に、リズムや調性などは「ピアノスポーツ」よりも複雑になるが、スタッカートの奏法については復習となるため、

より容易く取り組むことができるだろう。

③知識・技能の両方に問題のあるグループに「ピアノのおけいこ」を使用した上での課題は、対象者が運指番号ばかりを頼りに演奏してしまったこと、曲の長さが長いことであった。運指番号を頼りに演奏するという課題については、例えば狭い音域の曲で、ポジション移動が含まれない曲であっても、意識的に指かえを使って練習するよう指導者が指示をすることが解決につながる。一点ハ音を連打する練習があるが、それを同じ1の指でばかり弾かせるのではなく、1、2、1、2などと指かえをして弾かせることで「右手は1の指ならド」という固定した感覚を植え付けないようにする。また曲の長さの課題については、指導方法として、スモールステップを大切にし、一気に曲の全小節を扱うのではなく、区切りの良い部分で切るなどの工夫が大切である。

最後に④問題なしグループについては、特に課題は見つからなかったが、さらなる効果を望むのであれば、「バステイン」には歌詞が付いているため、歌いながら練習することが望ましい。歌詞が付いている音楽の方が曲のイメージがしやすく、強弱などの表現の工夫にもつながりやすい。さらに本学の学生に特化して考えれば、歌いながら演奏することは弾き歌いにもつながる。

5 まとめ

本稿では、ピアノ初心者である対象者について、その演奏技術を向上させるための指導方法として、それぞれの課題に合った教則本を用いることにより適切な指導が可能なのではないかと仮定し、研究を進めた。

対象者を①知識に問題のあるグループ、②技能に問題のあるグループ、③知識・技能の両方

に問題のあるグループ、④問題なしグループの4つのグループに分け、それぞれに適切だと考えられる教則本を使用して指導を行なった結果、成果と課題が見つかり、さらにそこから改善策を提案した。

初心者の課題に合わせた教則本の使用は、ある一定の成果を得ることができたが、どのグループについても1種類の教則本では不十分な点が明らかとなった。不足している部分を補うために他の教則本を併用したり、指導する側が特別な声かけを行ったりするなど、工夫が必要である。何より大切なことは、指導側が対象となる者の課題を正しく把握すること、また各教則本の特徴を理解しておくことである。この教則本さえ扱えばうまくいく、というものは存在しない。指導においては対象となる者の課題の把握と教則本の特徴の理解を含む指導側の技量が求められる。

引用・参考文献

- ・ Bastien, James 著、東音企画 (1989) 『バスティンピアノベーシック レベル1』東音企画 (日本語版)
- ・ Beyer, Ferdinand 著、全音楽譜出版部編 (1955) 『標準バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社
- ・ Burnam, Edna Mao 著、大島正泰監修、中村菊子解説・訳 (1975) 『バーナムピアノテクニックミニブック』全音楽譜出版社
- ・ 藤井 翼、小堀 聡 (2013) 「眼球運動を手掛かりとした楽器演奏の認知過程の検討」『人工知能学会全国大会論文集』27巻、pp. 1-4
- ・ Glover, David Carr 著、Garrow, Louise 共著、東亜音楽社『グローバー・ピアノ教本〈VOL. 1〉』東亜音楽社
- ・ 波多野誼余夫編 (1987) 『音楽と認知』東京大学出版会 (参考部分：大浦容子「3 演奏に含まれる認知過程—ピアノの場合—」 pp. 69-95)
- ・ 井口基成監修、子供のための音楽教室編 (1958) 『あたらしいピアノのおけいこ』音楽之友社
- ・ Miller, Carolyn 著、安田裕子訳・解説 (2001) 『キャロリン・ミラー ピアノスポーツ①』全音楽譜出版社
- ・ 宮脇長谷子 (2001) 「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』第15号、pp. 1-11
- ・ 中村礼香 (2015) 「ピアノ初心者のレッスンにおける教則本の比較」『鹿児島女子短期大学紀要』第50号、pp. 77-88
- ・ Thompson, John Sylvanus 著、大島正泰訳 (1972) 『トンプソン現代ピアノ教本』全音楽譜出版社
- ・ 徳富聖子、安原雅之 (2004) 「ピアノ教則本の比較研究にむけて」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第18号、pp. 75-86
- ・ Van de Velde, Ernest 著、安川加寿子訳 (1998) 『新訂メトードローズ ピアノ教則本』音楽之友社